



寝取られ
さいみん
ハーレム♥



ご主人様の 堕としごと2



七猫

三反

五

看休清

お出かけに
なるのですか？

ああ
後宮の様子を
見にな...

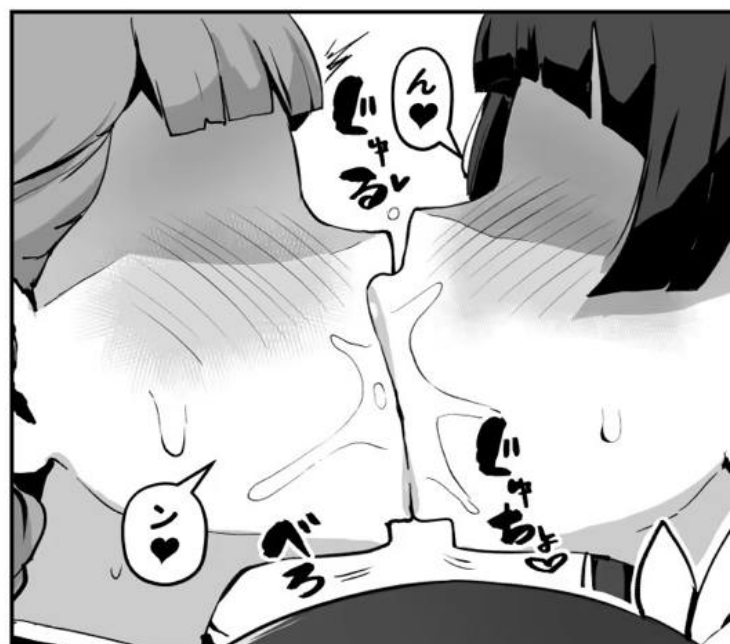
猫猫
♡

はい♡
お供します♡



人を
意のままにする
催眠の秘薬

すでに後宮の
ほとんどのものが
この薬で暗示に
かかっている









流石はドスケベ
上級妃の梨花様



私のような男の
ちんぽにも
手を抜かないw

ほっ

当然です♥
どんなちんぽでも
エロまんこで精子
下品にぶっこやく♥

ニムン

あは

ニムン

催眠エロブタ
上級妃としての
務めですから♥



それは
嬉しい



腰も気合も
んっ♥
入ります♥

ましてや
こんなブツとい
デカちゃんぽ
ならあ♥



では主上の
ものと比べて
どうですか？

ねちゅ

そのような
こりよ...

はっきり
言ってください
梨花様



比べるまでも
れる♡
ありません♡

こっちのほうが
れる♡んぶ♡
いい♡しゅき♡

あんな粗ちん♡
もう絶対に無理♡
イケません♡

デカチン
ラブルす♡



このエロブタ
スケベ女がW

んほお♡
申し訳ありません
スケベで
ぬほっ♡





見事な
イキっぷり
でしたよw

おひっこが
でりゅっ♡
ほおお♡

催眠を使つての
快樂調教も
始まつており

こんなことを…
ひれ♡おっ♡
許さによ…ほ♡

じゅわん♡
じゅわん♡
じゅわん♡

会うなり
押し倒して
パイズリとは

そんなに
私のちんぽが
恋しかった
ですか？

でかちんぽお♡

ふふ♡
そうですね♡
私は催眠に
かかつて
いますから♡

早くこのデカパイで
肉竿ガン勃ち
させてケツ穴♡
可愛がって下さい♡

たぽ♡
たぽ♡

たぽ♡
たぽ♡

すでに梨花様は
催眠ありなし関係なく
御主人様にゾッコン
になりつつある♡



ここまで後宮に
薬を広められた
のは玉葉様の力も
大きい

猫猫♥後で
薬の追加っ
よろしくね♥

んべ♥れろ
分かりまひら♥

ふふ
皆さんも存分に
楽しまれて下さい

いいなりの皇帝も
上手く使って♥
まさしく全てを
ご主人様に
捧げている

もっと舌
絡ませろ

はひ♥
んぺ♥

ちほい
ちほい

ええ楽しんで
いますとも

そして
宮廷…

ブツ

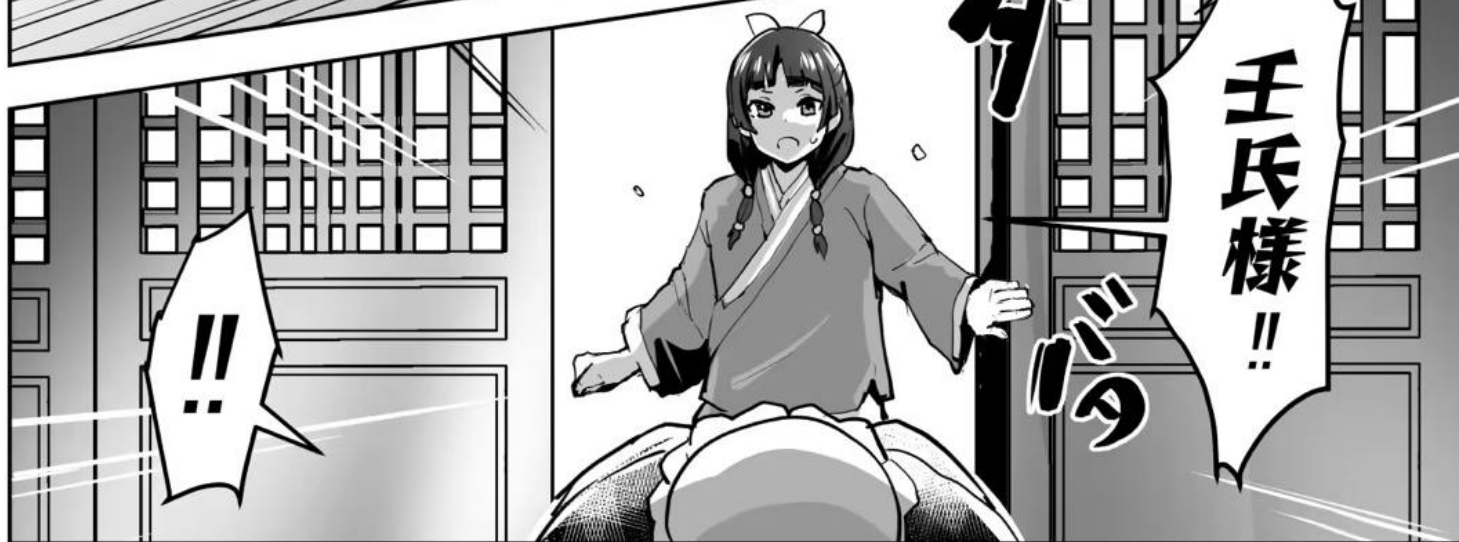
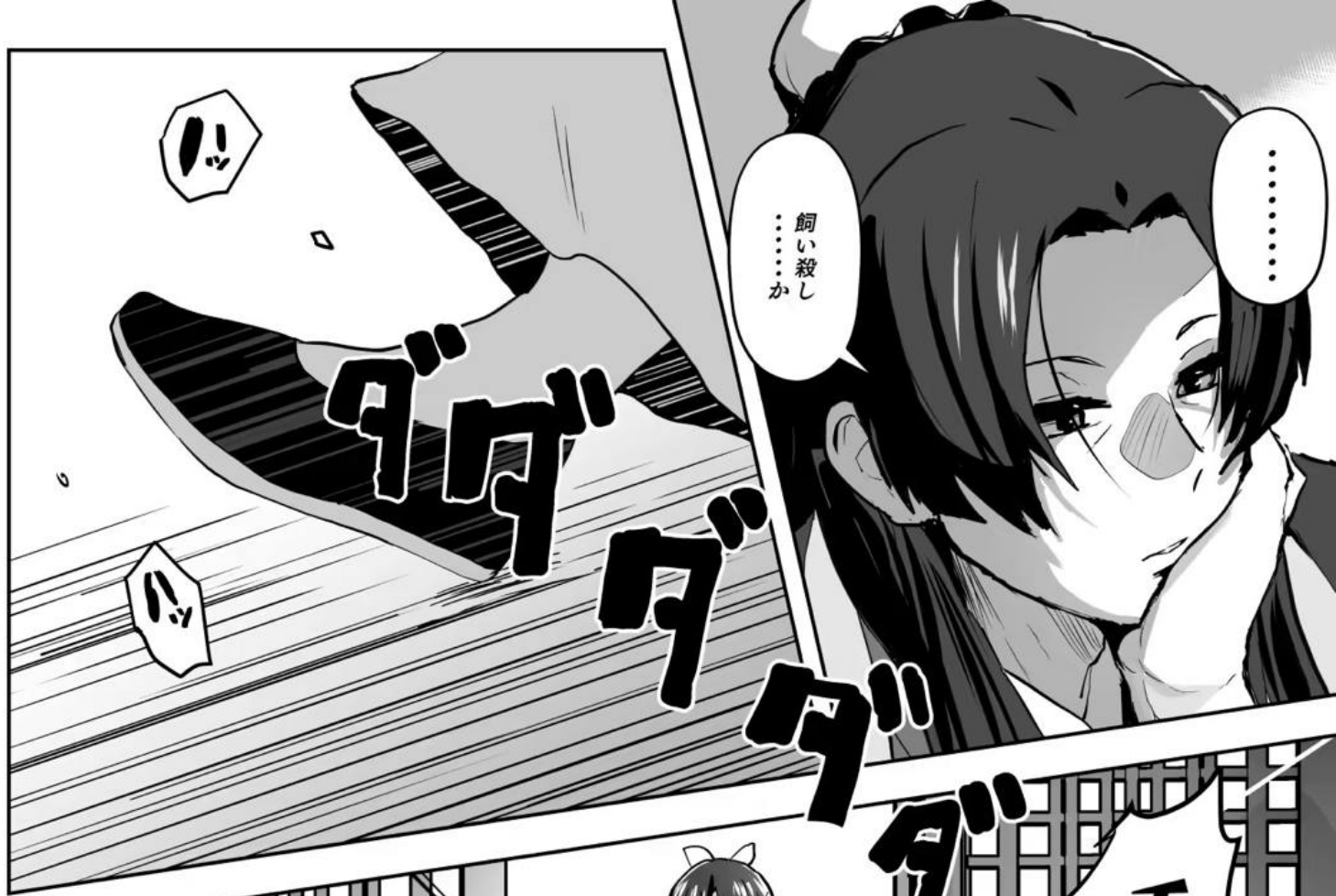
パイ

パイ











誤算だった

すまない
俺は暗示で
後宮から
でられない

なっ

王氏様に
薬の材料を
用立ててもらっ
つもりだったのに

先に王氏様の
暗示を解かないと
いけない

そして現状
材料があるのは
翡翠宮だけ...

気が進まないけど
一度戻るしか...

あっ
♡

猫猫♡

乳首
イクっ♡

小蘭

し翠子

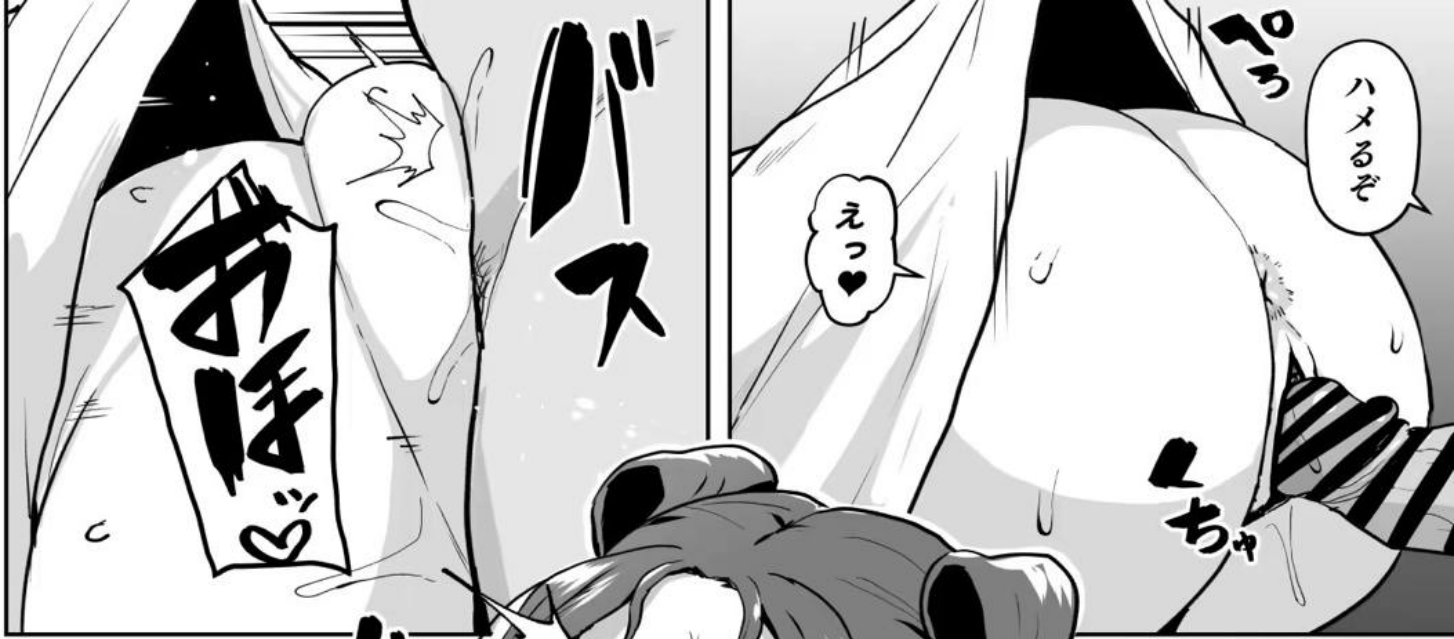
ビクッ

ぎゅ

い

い





ダメ♡牝おまんこ
こんなのすぐイク♡
イクイクイクイク



というわけで
猫猫も♡

何がという
わけなのか

熱ッ♡

ぽい♡

でも…♡

これを前に
すると

ちろ♡

れりゅ♡
ん♡

れらあ♡
れろ♡

んろ♡
べりよあ♡

身体が
勝手に…♡



ご主人様♡
トロトロほかほか
まんこにあちんぽ
ヌポスポ♡

お願い
しまーす♡



欲しがり
エロ娘が



おひんぽ
くりゅ♡





飼い猫が
主人に噛みつこう
なんて♡

あは♡
猫猫の様子が
おかしいの
バシバシ
だったよ

そうだな
子翠

いや楼蘭の
ほうがいいか？

あん♡
どちらでも

その通りだろう
あれを作った変態が
不測の事態を
想定していない
とは思えない

しかし
解除薬とはな

まあ万が一を
考えれば
あるのも当然か

隠したのは
自分以外に
使わせたく
ないから…

…ってそんなこと
よりこの状態を
なんとかしないと
また薬で…

大丈夫よ♡





ケツやまんこで
遊ばれ
イカされ続ける



豚みたいで
可愛いわよ
猫猫♡



可愛そうな
猫猫♡

ご主人様に
おちんぼして
もらえないんだあ♡

本当
バカだよ♡

けれど
決してちんぼは
ハメてもらえない





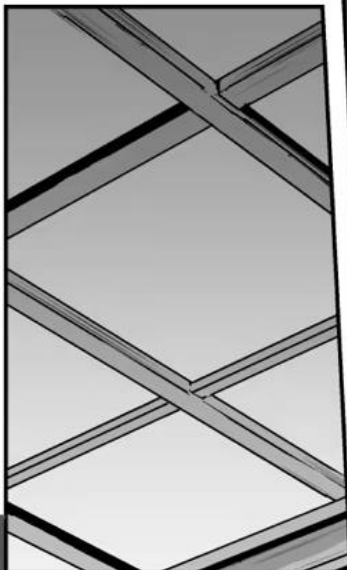
催眠状態と
自我の同一化
だっけ？

今思えば
私も同一化が
進んでたんだな

だからか

ブギン

そろそろ
やるか？
猫猫



これ

ほし
ほお

ソク

お

ソク

へお

これこれ

下品な牝声だして
ドスケベなエロ猫

ちゅる

ちゅる

い

しまんこに
ピッタリで
最高すぎるー

ずっと我慢
していたの
だもの



っ♡…催眠薬♡
飲めってことか
自分の意思で…

飲めばきつと
終わり
だろうなあ♡

こんどこそ
完全に♡イツ♡
の事以外どうでも
よくなる

おやじ

婆

小姐ちゃん達

小蘭

子翠…

薬…
なにもかも

はあゝ

王氏様…
絶対に
怒るよな

薬屋

待っている

ん♡

ちゅ♡

ピキ♡



まあ

スキ♡

ズレ♡

仕方ないか♡

ベレ♡

スキ♡



よし猫猫
暗示を
かけるぞ

はい♡
かけて
下さい♡

今からお前は
中出しで負ける

はい♡
負けます♡

ああ♡
ワクワクが
止まらない♡

幸せが
あふれてくる♡

ドキ♡
ドキ♡

そして
未来永劫
俺のものになる

はい♡
なります♡



受け取れ

はひ♡
催眠精子
うけとりゅ♡

エロ催眠
最高うう♡

ご主人様ちんぽ
完全屈服♡♡

敗北エロアクメ
いつぐう♡

ほろむ

ビュル

ルル

ほろむ

ぎゅ

うーん

うーん

ドゥ



その後
壬様の上で
ラブラブ
パコリまくって

雑魚雄と
本物の雄の差を
わからせ♥

へいっ

ごほ

ほっ

最後は
壬様の顔に
ケツを押しつけ

れるる

ずいっ

ご主人様デカちゃんを
お掃除♥
しゃぶりまわした♥

ぐわろろ

ごめい

っっ

っっ

……
かけていいとは
言っていない
だけだなあ

相変わらずの
マゾ雑魚ちゃんぽは
精子も薄いw



いい機会だったので
二度と
歯向かう気など
起きないよう

王氏様には
調教を受けてもらう
ことにした

息子の前で
ガチイキするっ♡

堕ちる♡好きになる
デカちゃん様で
イグっ♡

何度も何度も
ご主人様との
格の違い♡

はあ

これが本当に
同じ雄だと思っ
猫猫♡

暗示で
服従させても
つまらないしな♡

雄として如何に
自分が劣っている
かを理解させる♡

本当の母君の
前でもデカちゃん
なんですな♡

もう少し
頑張ったら
どうです？

む…
おっぐっ

ほい

ムンッ

では
実験用の
新しい材料は…

ああ
問題ない

そうですか♪
流石です
王氏様

ありがとうございます
ございます♡

では私は
これからちんぽ様で
イキまくるので♡

シコリたかったら
シコってもいいです
けど

邪魔はしないよう
お願いしますね♡

キーン♡
キーン♡

そのかいあってか
今はすっかり従順♡
私たちのために
働いてくれている♡

好きだぞ
猫猫

はにゃ♡
私もですう♡
すき♡

まさか里樹様が
こんなスケベロリ
に……っ

こうして宮廷
内外の支配は
順調に進んでいる

ふふ
ご主人様は
凄いのです♡

おちんちん
精子い♡

お力添えを♡

これからも
皆さんの……

まーい

里樹様の
ためならっ!!

んおっ!!

えいっ♡

ロリ顔に
だすっ!!



絶倫すぎい♡

ちほ♡

あ♡

ほ♡

猫猫の
ご主人様ちんぽ
すっご♡

腰とまらなっ♡

でしょ♡

ドスケベ姉妹
発情エロまんこ♡

好きなだけ
ほじり倒して
下さい♡
ご主人様♡

このままいければ
全てを手に入れる
日もきつと
遠くはない♡





嬉しい♡
だけど

安定期とはいえ
このお腹だと
薬の調合がさ

なーんだ♡
最近是他の人にも
作らせてるんでしょ♡

いいじゃん
それで♡

うん♡
薬じゃなくても
猫猫はお役に
立ってるよ

おい
猫猫

そんなことは
いいから
こちらに來い

そのボテ腹で
俺を楽しませろ
それが役に立つ
ということだ

はい♡
ご主人様♡

二人も順番に
ハメてやる
オナって待ってろ

猫猫ったら
激しい♡スケベ♡

ああ♡なんて幸せ
なんだろう...♡

はい♡

ほっ♡肉便器
まんこイケツ♡

ちんぽ
最高♡

これからも
お仕え致します

ずっと♡

終♡

ご主人様のはかりごと2
上級妃に迫る妖怪堕ちの魔手、ヤクオチニ対す

日高久志

「あぐううつ…！な、なぜなの…？
私が…そんなつ…」

子一族の女主人、神美が泡を吹きながら崩れ落ちた。
その姿を見守る子昌、王氏、羅漢は静かに目を閉じ、
彼女が事切れるのを待っている。

反乱の計画が露見した神美を秘密裏に排除するように
帝から申し付けられていた。

子昌がそれに納得したのは意外だった。
婿養子である彼は、神美には逆らえない様子だった
からだ。
後宮入りした彼女を望んで貰い受けた男が、裏切る
とは思えない。

「ああっ…」

神美の吐息がヒューヒューと音を立て、小さくなる
につれて子昌は膝を折り嘆息した。
帝が柘榴宮に足繁く通い、桜蘭妃と逢瀬を重ねる頻
度が毎日となって久しい。

玉葉妃に続いて男子を授かるのは桜蘭妃だろうとい
うのが、後宮のもっぱらの評判だ。
そうなれば不穩分子の母親は早々に処分しておく方
がいい。

（わかってはいる…
だが…気分のいいものではない…）

喉に引っ掛かる違和感。

王氏は襟元を正しながら、気持ち悪さと格闘してい
た。

得体のしれない何かが、自分の預かり知らないとい
ろで蠢いている。

猫猫が指摘した通りだ。

（桜蘭妃から目を離してはいけないとは…このこ
とを指していたのだな）

猫猫の洞察力に感心しながら、王氏は気を引き締め
る。

羅漢と共に、彼女の一挙一動に気を配るのだ。

もし帝を害することがあれば、国ごと揺らぐ。

その瀬戸際にいるのだ。

（猫猫はどうしているだろうか？）

神美が事切れ、王氏の興味は猫猫に移っていた。

この情勢では彼女にばかり構っている訳にいかない。
それでも会いたいと思う自分に、王氏は（なんとい
うことだ）と驚いてばかりいた。

猫猫がどうしているか？

王氏が桜蘭妃達、子一族に振り回されているその時。
お気に入りの場所、暗く薄暗い薑盆の中にいた。

「ぐうでしゅうつ」

気に入ってくれましたか？翠苓」

「ひいつ！」

翠苓は猫猫が突然現れたことで、さらに肩を震わせ
た。

この薑盆に彼女を幽閉したのは、他ならない猫猫だ。

気丈な翠苓が蟲に異常なまでの恐怖を示すのは、こ
のお仕置き部屋に閉じ込められた経験があるからだ
ろうと猫猫は推測していたのだ。

蛇や蜘蛛などが群がる部屋で、恐怖に慄いていた翠
苓。

さらに顔を引き攣らせたのは、猫猫がニタリと笑っ
た口元を見た時だ。

暗い薑盆の中でもはつきりと分かる。

まるで蛇のように長い舌がヌメヌメと動いていた。

金色の目を爛々と輝かせる怪し気な笑みと、薄紫色
の肌。

一目で猫猫が人間じゃなくなってしまったと分かる。

「ち、近づかないでっ…！これ以上…！」

叫んで身をかがめるのがやつとだ。まるで蛇だ。
トラウマが蘇って、もう猫猫の顔を覗けない。

そんな翠苓を嘲笑うかのように、猫猫は顔を近づけ
た。そして頬を舐め回した。

粘り気のある唾液が翠苓の頬にネットリとこびりつ
く。

「いやあっ……!」

いつも冷淡な瞳で見下ろしてきた翠苓の怯える様子に、猫猫は「この姿がそんなに怖いんですか?」とはしゃぐ。

今までの猫猫とは違う。残虐な本性が垣間見えた。

「でもそんなこと、もう気にならなくなります。翠苓も…子翠と同じ私達の仲間になりますから♪」

「んくっ…♪」と猫猫が喉を鳴らす。

長い舌の先に、濃く紫色に輝く丸薬が巻き取られて出てきた。

「お裾分けです♪」

ほらあ…甘い香りがたまらない♪」

丸薬が唇に押し付けられて、翠苓は口を閉じておくのがやっとだ。

ネチャネチャと甘ったるい飴の粘り気が、舌を撫でる。

「ひゃっ!ひゃううっ……!」

翠苓はらしくない叫び声をあげて、飛び上がる。

猫猫が手を回して乳首をひねり上げたからだ。

「カマラ様は貴方のように聡明で賢い子女が何より好まれます♪」

私のような牝豚奴隷の中でも、性処理以外に利用価値が高いですから。

翠苓なら地位や名誉もなくても、カマラ様の元で存

分に働けるでしょう♪」

「なっ、なんでっ……!うくうっ♪」

「だからあ♪…素直に受け入れるんです、翠苓!」

猫猫は翠苓の長い後ろ髪を引いた。

自然と上を向いた彼女の口が開く。

そこに唇を合わせ、舌ごと丸薬を喉奥まで押し込んだ。

「うごおおうっ……!」

んぼおっ!おごおおおおっ!」

暴れる翠苓を抑え込みながら、猫猫は喉奥を舐め回す。

妖怪化している猫猫の力に、翠苓は為すすべがなかった。

「むぐううっんっ!おおおっ……!」

くううっ♪おっ!おふう…♪んんっ…♪」

しばらくすると翠苓の吐息に、苦痛とは違う響きが混ざり始めた。

猫猫は目を細める。

(んん…♪やっぱりカマラ様の精液玉で喉奥キスは効くうっ♪

どんな牝だってイチコロな訳だ♪あふうっ!しゅきい…♪)

ジュポジュポと卑猥な水音を響かせながら、翠苓の喉奥を味わう。

翠苓自身もそれを受け入れるように「ゴクゴクと喉を

鳴らした。

身体をさつきよりも激しく震わせる。

ビクビクッ!ビクビクッ!と忙しなく。

だがそれは恐怖じゃない。

自分が快楽に溺れていって、我慢が利かなくなっているのだ。

弄られた乳首が乱れた袖元にピンピンになって覗く。

「おうごおっ……!」

これえ…♪どお、どうしてえ…♪

おふうううっ♪甘いいいっ!美味しいのお♪」

翠苓自身も猫猫の長舌に、舌を絡めてしロレロと自ら舐め取り始めた。

「んんっ♪欲張りですね、翠苓♪」

そんな貴方には取り返しがつかない量を差し上げます♪」

丸薬一個では、中々人間を辞めるまでの効果は期待できない。

カマラ様に抱いて貰えるなら別だが、こんな僻地までご足労頂くのも忍びなかった。

だから猫猫は腹に貯めていた。

カマラ様から頂いた大量のザーメンを。

自分の中で器用に丸薬に精製していたのだ。

ゴロゴロと擦れ合いながら、猫猫の喉奥から丸薬が何個も何個も溢れ出た。

それがそのまま翠苓の口の中へと放り込まれた。

「んごおおっ♪んむうっ…♪
おおおうっ！んぐうっ…！」

二人の口の中を十数個の丸薬がいったりきたりして
いた。

翠苓の口元から、紫色の粘液がダラダラと垂れ流さ
れていく。

喉を鳴らしながら、翠苓は慌てた。

（もったいない）と。

身体が熱い。火照って意識ですら熱を帯びていくよ
うだ。

（き、気持ちいいっ♪
なぜえっ…？嫌だったのにっ…

私はおかしくなっている…ああっ♪でもお…
幸せえっ♪これが私の居場所お♪）

「うくうううっ…♪

おふううっ！くほおおっ♪」

猫猫が長舌を引き抜いた。

ゴボォッ！と栓が抜かれた時と同じ音がして、翠苓
の口から丸薬が溢れ出してくる。

「だ、だめえ…♪

も、もったいないわあっ…♪」

それを見た翠苓は慌てて床に這いつくばった。
舌で丸薬を掻き集め始める。

もちろん散らばった丸薬は翠苓の短い舌では中々、

絡め取れない。四つん這いになって、尻を高く掲げ
て無様に追い回る。

蛇や蜘蛛が床にいてもお構い無しに。

「もっとお♪もっとお…ほしいっ♪」

中毒になっているように、目を爛々と輝かせる。

その内、舌も丸薬を掬いやすいような長さへと変わ
っていく。

「はあんっ♪やったわあっ♪

えへえ♪全部う…♪味わえるう…！」

猫猫は翠苓の肌が薄紫色に変わっていくのを満足気
に見下ろしながら、自分の作った丸薬の効果を実感
していた。

浸透率を変えて精製したもので、一定量を超えれば
カマラ様に抱いて貰わなくても、妖怪化が可能にな
った。

その実験が今、成功したのだ。

子宮に眷属の証が刻まれていないので、正確には身
体だけ強制的に妖怪に置き換えたようになってはい
るが。

猫猫には些細な違いだ。

カマラ様の為に働く奴隷が新たに誕生したのだから。

（これで…後宮内にカマラ様の牝豚奴隷を量産でき
る♪そうなれば子翠…桜蘭妃以外の三妃にも手が届
く♪）

猫猫が新たな手段を考えることになったのは、彼女

が勧めた房中術を三妃ともに拒絶してしまった事
にある。カマラ様に抱かれてくれたら、事は簡単だっ
たというのに。

後宮で帝以外へ貞操を捧げることは出来ない、突
っぱねられたのだ。

楼蘭妃に籠絡されている帝ですら、無理強いは出来
ない。

むしろ精力を増幅させられて色ボケさせられている
帝を、あまり外に出せない事情もある。

皇太后の意向もかなり反映されているだろう。

（手駒を増やそう。

それもとびぎりに優秀な…♪）

猫猫には心当たりがあった。

カマラ様に捧げるにたる女達で、計画に有用な者達
のことを。

（ババアには…いなくなって貰うしかないな）

邪悪な笑みを浮かべる猫猫だが、足先にコツツと丸
薬が転がってくる。

何度もメスイキしながら、頑張って舌で丸薬を集め
る翠苓だが、全て舐め取るにはまだかかりそうた。
そうなると勿体ない。

「仕方ない♪貴重な…カマラ様の精液を♪

このままにはしておけないっ♪」

猫猫も翠苓と同じように、四つん這いで尻を高く
掲げ、床に舌を伸ばした。

二匹の牝豚が汚い牢の床で、レロレロと丸薬を追う。

後宮で一二を争う才女達が。
まるで本当の家畜のように……

—————

「李白だけはない。」

高順まで私に隠して通っているというのだ」

王氏が猫猫の前で、頭を抱えていた。
深い溜息。

（この方は私に愚痴れば、何でも解決すると思っ
ているのだろうか？）

猫猫は冷たい目で見下ろす。

カマラ様と出会う前は、少しは尊敬する気持ちもあ
ったのだが、今では「取るに足らない男」に過ぎな
い。

生かしておく必要すら感じないゴミ虫と変わらない
存在だ。

だがカマラ様は彼に見せつける事を、楽しみにされ
ている。

今は色々と気取られる訳にはいかない。

「奥方にバラせばいいのでは？」

「実はその細君が勧めたのだ。」

是非、行って来いと。一体、何を考えている……？

あの男が買った妓楼なんかに」

そこまで言って、王氏はハッと気付いたように猫猫
の顔を見た。

「王氏様がカマラ様のことをよく思っていないのは
存じています。
ですが、私の古巣の危機を救ってくれた事は確かで
す。現状がどうあれ」

緑青館を仕切るやり手婆が、突然の病に倒れた間に、
妓楼が何者かに放火されたのだ。

妓女達は猫猫の手引きもあり難を逃れたが、婆と働
く場所をほぼ同時に失った彼女達は路頭に迷うところ
だった。

それをカマラが私財を投じて、身請け同然に囲った
のだ。

急ごしらえて花街に緑青館をすぐさま再建してみせ
た手腕は、王氏も目を見張るものがあつた。

だが異国のとはいえ、彼は商売人だ。

遊女ではなく、芸を売る芸姑だった者たちにも、積
極的に客を取らせ始めたのだ。

白鈴、梅梅、女華の三姫も例外ではない。

彼女達が抱けるとなり、緑青館で大金を浪費するよ
うになった者も少なくない。

李白はほうほうに借金をするまでになり、高順もど
こか上の空であることが多くなった。

「それで緑青館と縁のある私に様子を見てこい
と？」

猫猫が王氏に詰め寄る。

珍しくたじろいだ王氏は顔を赤らめた。

猫猫は悪戯な笑みを浮かべる。

「どんなご乱行であれ、慣れていますから。
心配しなくてもいいですよ」

「な、なら……いい。」

内偵を頼めるか？危なければすぐに手を引け」

猫猫を押し退け、王氏が目キツと睨んでくる。

遊ばれていると分かっているにも、それを怒ることも、
罵ることも出来ない。

（本当にくだらない男だな）

王氏を後宮に置き去りにして、猫猫は新しい緑青館
へと赴いた。

足取りは軽い。

扉の向こうがどんなことになっているか、見なくて
も分かる。

「カマラ様♪

ただいま戻りました。

カマラ様の忠実な下僕、牝豚信徒猫猫です♪」

薄紫色の肌になった猫猫が、開け放った玄関で土下
座をして主人を出迎える。

その姿はいつもの猫猫からは想像も出来ないほどに
へりくだっていた。

「その様子だと、仕込みは順調のようですね。

ふふっ……！お前は有能すぎて時々、怖くなる。

だがそういうところも魅力的ですが」

金色の目を輝かせ、館の中央の玉座に座り女を何人
も侍らせている男。

デ・カマラ神父。

西洋風の禍々しい内装が施された新緑青館に、かつての面影はない。
カマラのタトゥーと同じデザインをした装飾が至る所にある。

ここはもうカマラの“城”なのだ。

「カマラ様、王氏が“予定通り”、私を使いに出しました。」

あの男に見せつけるなら、今が好機かと♪」

猫猫はニユルリと長舌を出しながら、カマラを見上げて媚びへつらった。

カマラは不敵な笑みを浮かべて、彼女を指差す。

「それはまだ早い。」

“予定通り”というなら、上級妃は全てこうして侍らせているはずでしょう？

コチラは三姫に過ぎません。王氏には取るに足りない女達だ」

全裸のカマラのそそり立つイチモツに絡みつく3つの長舌。緑青館の誇る三姫、白鈴、梅梅、女華の成れの果てだ。

全員が猫猫の手引きで、精液丸薬の虜になり、カマラに服従した。

李白や高順だけでなく、武官を何十人と骨抜きにする働きを見せている。

そして今や緑青館にいる妓女は全て、カマラによって妖怪化されてしまった。

猫猫は立ち上がって、舌から精液丸薬を転がしてみせる。

ネチャアツと糸を引き、邪惡に紫の光を放った。

「でももし宜しければ、この後に妃教育にご一緒されませんか？」

三姫を伴って♪」

「それは……なるほど！」

信徒猫猫！！仕込みを終えたのですね！！

それは良い！」

カマラが興奮して玉座を立った。

白鈴の豊満な乳房を鷺掴みにして猛る。

「ああんっ♪カマラ様が喜んでいらっしやるっ♪」

「さすが信徒猫猫ね♪頼りになるわ♪」

「私達をカマラ様に導いてくれたのも信徒猫猫だもの♪」

三姫は口々に猫猫を褒め称える。

カマラですら、王としての威厳をかなぐり捨てて、抱きしめてしまいたい衝動に駆られた。

妃教育にカマラが参加出来るということは、後宮に出入りする事が出来るようになったということだ。

宦官以外の男子が入ることを禁止されている後宮に、房中術などという建前が必要なく入れる。

「どうやって為したのです？
聞かせてください！信徒猫猫」

上機嫌のカマラに、猫猫はハッと何かに気付いたように慌てる。

「え……い、いや……その……」

普段、常に堂々としている猫猫らしくない狼狽をみせ、目を泳がせる。

「こ、後宮は変化を嫌います。」

そこに付け込んだまで……です。

私の行う妃教育は里樹妃を除けば、“次”を求められるもの。

ですからそれを発展させました。

それにそれぞれの妃は私に弱みを見せたことがあったのです」

猫猫は自分への信頼を逆手に取って、妃達を貶めていた。

「例えば、里樹妃は幽霊に怯えることがありました。その謎を私が解いて差し上げたのです。」

ですがもう一度、同じように幽霊が出て、この私が“分らない”というだけでどうでしょう？

彼女は怯えすくんでいました♪

だから小蘭に、添い寝をさせることを提案したのです♪」

その結果がどうなっているか、カマラにも想像がついた。

ますます滾っていく。

「ならば紅娘が仕込んでいる玉葉妃だけでなく！
身持ちの固い梨花妃にも、繋ぎが済んでいると言う
のですね！！」

猫猫はあまり大きくはない自分のおっぱいをこれ見
よがしに持ち上げる。

「彼女に教えることが出来るのは、三姫とカマラ様
だけですから♪」

私では大きさが比較になりません♪」

「はははっ！！」

その為の緑青館というわけですか！！

自分の生まれ育った大恩ある故郷をその為だけに
っ！！」

三姫のおっぱいをこねくり回しながら、カマラは熱
り勃っていた。

ついにその時がくる。

猫猫は頭を下げ、その高笑いが収まるのを待った。
心の中では、少しドギマギとしながら。

（さ、さすがに房中術でゴリ押するカマラ様のや
り方を逆手に取ったなんて言えない…

それじゃ喧嘩売ってるだけですよ、とか。

カマラ様が反感を買ってくれたから、付け込みやす
かったとか…私なんかと言えるはずがない）

カマラの眷属になり、絶対的な主従に目覚めた猫猫
は、初めて主人を敬うことを心の底から出来るよう
になっていた。

例えご主人様よりも優秀だとしても、それを鼻にか
けることがあってはならないと謙遜している。

そのいじらしさが薄紫色の肌に堕ちた妖怪猫猫をさ
らに、可愛く魅力的にさせているとも知らずに。

—————

深夜。

水晶宮の中は人払いをしたために、静まり返ってい
た。

梨花妃の寝室にだけ、煌々と明かりが灯っている。

「この者たちが…なのね」

梨花は緊張した面持ちで、緑青館の三姫を眺めた。

それぞれ個性的な美人で、自分とは比べ物にならな
い色香を醸し出している。

3人は乳房を放り出してはいるが、下品には感じな
い。それぞれが美しく、ロウソクの灯りで照らされ
て妖しく揺れる。

「はあんっ♪私も…こんな風になれるかしら？」

梨花は舌で丸薬を転がしながら、ウツトリと眺めて
いた。

上級妃には“人間を辞めてしまっ”量の丸薬をもう
配り終えている。

一番、最初に中毒になったのは梨花妃だった。

里樹妃は味が気に入らなかったし、玉葉妃は母乳に
出るのを嫌ったせいで、染め上げるのに難航してい
た。

だが梨花妃は、猫猫が“おっぱいをさらに大きくす
る薬”だと勧めたことで、飛びついてしまったのだ。

今ではこうして、誰かと顔を合わす時でも口に含ん
でいる。

「なれますね、梨花様なら。」

どうでしょう？一緒に乳房を突き合わせてみて
は？」

座って見ていた猫猫がおもむろに立ち上がる。

そして肩から服の袖を外していく。

小ぶりながらも形の良い、美しい猫猫のおっぱいが
露わになった。

梨花は舌なめずりをしながら、見惚れてしまう。

「そうね♪恥ずかしがる必要はないわ♪
皆、その為に来てくれたんですから」

梨花妃もおっぱいを突き出して、身体を振る。
だがその熱っぽい劣情が少しだけ正気を取り戻した。

視界の端にカマラが映ったからだ。

カマラはニツコリと微笑むと、頭を下げた。

「どうぞ、お気になさらずに。」

私はこの者達のお目付け役。

梨花様がどれだけ乱れてもかまいません。

後始末はお任せください。

そして私に御用があるならば、それも遠慮なく」

「わ、わかっています」

梨花は気を静めようと、猫猫に視線を配る。

猫猫は頷いて、彼女に目配せをした。

猫猫がいる。それだけで梨花は、この恥ずかしい妃教育を乗り越えられる。

「猫猫…♪」

そ、その前に…貰えないかしら？

もうなくなりそうなの」

「仕方ないですね♪」

舌を出して、おねだりしてください♪」

梨花は猫猫に促されるまま、屈んだ姿勢で口を開けた。丸薬が溶けて、放り出した舌を紫に染めていた。

「はふうっ♪猫猫、ちょうだい♪」

いつもみたいに…いっぱい貯めてえ♪」

猫猫は、とろけた顔で口づけをねだる梨花の頭を抱き抱えた。そして喉を鳴らすと、そのまま唇を奪う。

「うむうっ…♪んんくうっ♪」

あふうっ♪んんっ…」

「おふうんっ♪いいっ♪」

んちゅうっ、うちゅるううっ…♪」

二人の舌が絡み合い、その間で丸薬がやり取りされる。ネチャネチャといやらしい水音が、誰にはばかることもなく鳴り続けている。

「新しいのお♪んふうっ…♪」

やっぱりいい…♪猫猫の口移しじゃないとお♪んまあっ、んちゅううっ♪私、駄目なお♪」

「そう仕込みましたから♪
んむああっ♪んふうっ…ちゅううっ♪」

「仕込んだなんてえ♪」

人聞きが悪いわあ…あむうっ♪」

でもお…そうねえ…猫猫に染められちゃったかも
お♪」

カマラの前だというのも、お構い無しに舌を絡め合う二人。溢れ出た唾液がポタポタと床を汚す。

猫猫は丸薬を渡し終えると、夢中になったままの梨花を突き放した。

ヨダレが糸を引き、梨花が名残惜しそうに「あんっ♪と喘いだ。

「これでは何のために三姫を呼んだか分かりません。その下品に大きな乳を使って、主上を喜ばせるのでしょうか？」

「ですけれど……」

んんっ…いつもなら……あふう♪」

「では私の出番ですか？」

お前達、梨花様に秘技をお見せしてあげなさい」

いつの間にか梨花妃の隣に立っていたカマラが三姫を誘う。

「カマラ様あ♪乳奉仕のご許し、ありがとうございます
ますっ♪3人ともども誠心誠意、乳を振りカマラ様を心地よくさせて頂きますっ♪」

白鈴がカマラのズボンに手をかけ、イチモツを取り

出す。

大きく勃起した怒張は、湯気が上がりそうなほどに紅潮していた。

「ま、まあ…これはあ……」

すごいわね♪猫猫」

間近でカマラの男根を見た梨花は、興奮した様子で猫猫に手で合図した。

「はい♪カマラ様のオチンポ様は主上や王氏とは比べ物になりません♪」

子を宿すならばこのオチンポ様で、と。
どの牝でも思うことでしょう」

「ああっ♪こ、これが殿方の……」

帝がどれだけの上手かは分からないがカマラ様に比べて大したことないだろうと、猫猫は思う。

興味津々な梨花を見ていると、それが正解だと分かって我が事のように嬉しくなった。

「失礼しますっ♪カマラ様あ♪」

あむうっ…んんっ…ちゅるううっ♪」

白鈴は豊満なおっぱいを寄せると、カマラの男根を包みこんだ。

それでも挟みきれない亀頭にそのまま舌を這わせる。

ネットリといやらしく。

「ちゅばちゅっ…♪ちゅるううっ…♪」

んんむうっ…ああああっ♪」

端から見ている猫猫にでさえ、白鈴のバイズリが男性をどれだけ喜ばせるかが分かる。
澄まし顔のカマラだが、イチモツはピンクピンクとさらに元気になっていた。

「私達の乳奉仕もお…
どうかお楽しみくださいませ♪」

梅梅と女華は白鈴にチンポ奉仕を任せ、それぞれカマラの二の腕をおっぱいに挟んだ。
そしてスリスリと上下させ始める。

「おっぱいは…あんなふうにも使えるのですね♪
殿方は心地よいものなのでしょうか？」

「はいっ♪男も女も発情すれば、体中が性感帯になります♪帝も玉葉妃と梨花妃が、それぞれあやつて乳奉仕すれば天に昇る心地でしょう♪」

玉葉妃の名前が出たせいか、前のめりだった梨花妃が少し表情を固くした。

脳みその奥の奥まで蕩けるには、もう少しかかる。

玉葉妃と一緒に、カマラ様に「ご奉仕したいと思うままではまだもう少し。」

「うじゅるううっ♪んぼっんぼっ♪
んくるううっ…じゅぼじゅぼっ♪」

白鈴が口をすぼめて、激しいひよっとこフェラを披露し始めた。

あまりに下品な顔になって、美人が台無しだ。
彼女にいれあげている李白がこれを見たら、楼閣から飛び降りたくなるだろう。

「あっ♪ああっ♪
あんなに必死にいつ……」

梨花妃は自然と指を唇に当ててねぶっていた。
彼女もおしゃぶりしたいのだ。
口の端からヨダレが垂れているのにも気づいていない。

「カマラ様あ♪ああっ♪」

「ご奉仕しているだけですのに……♪
お乳が張ってきてしまいましたっ♪
宜しければ……んんっ♪
乳吹き許可をお願い出来ますでしょうか？」

「私もですっ♪カマラ様♪
カマラ様に頂いたデカチチ牝豚の特技い♪
是非、梨花様にも見て頂きたいのですっ♪」

梅梅と女華が切なげにおねだりする。
男を喜ばせる術はご奉仕のテクニクだけではない。
こうやって牝も気持ちよくなっているのを伝えるのも、大切なのだ。

「いいでしょう。見せつけてやりなさい。
梨花が自分もそうなりたいと思えるように」

昂っているのか、カマラは梨花妃を呼び捨てにし始めた。だがそんなことが気にならなくなるほど、異常な光景が梨花妃の前で繰り広げられる。

「んひいひいっ♪で、ではあっ♪
でりゅううっ♪牝乳がでまじゅううっ♪」

「んんふううっ♪
カマラ様に乳がかかってしまっうっ♪
でも望んで頂けるならあ」

ピュルウウッ♪ピュッピュッ♪

押し付ける二人の乳から、母乳が漏れ出てきた。
しかも量も多い。カマラの身体に飛び散り、乳を動かすたびに甘い匂いが部屋中に充満する。

「お、お二人はお子を身ごもっているのですか？
そ、それなのにこのような……ああっ♪」

「いいえ。残念ながら子宝はまだです。
これはカマラ様から頂いたお薬の効果なのです。
赤ん坊に飲ませる分を考えることなく、乳奉仕に母乳を使えますから♪」

そう言って、猫猫も自分のおっぱいを絞り始める。
ピュルピュルッ♪と小振りの乳からも、白い母乳が溢れ出した。

「あ、あなたも…？」

「梨花妃様も試してみますか？」

興味津々な梨花妃は自分でおっぱいを持ち上げて息を呑む。

「私もピュルピュル絞ってしまいますっ♪
んふううっ♪んんもおおっ♪」

白鈴はひよっとこフェラをしたまま、自分の乳も絞った。

溺れそうなぐらいの母乳が、乳に溜まっていく。

それがパイプリーするたびにタプタプと揺れるのは、なんとも靈感的だ。

「はううっ…♪母乳は赤ちゃんのものだと思っていましたけれど…」

こうしていると、美しいものですね」

梨花妃がはしたなく、自分の秘所を服の上から弄る。ついに我慢が出来なくなってきたようだ。

乳首も恥ずかしげもなくピンツと勃っていた。猫猫は自分の舌の上に薬を置いた。

そして長く伸ばしながら、梨花妃に突き出す。

「ねぶり取ってください、梨花様♪」

この薬を飲めば、梨花様も母乳をビュービュー出し放題ですから♪」

猫猫の舌が人間離れして伸びてきているのに、梨花妃は気付かない。

ただただ舌の上に載った白い薬を見ている。

そして誘われるままに舌をまた重ねた。

「ちゅばちゅるうっ♪んんちゅっ♪」

これでえ…♪んんっ、私もお…母乳をおっ♪あむうっ…ちゅりゅううっ♪」

夢中で舐め取る梨花妃の口に、丸薬を追加で押し込む。猫猫が把握している許容量をそろそろ超えてくるはずだ。

梨花妃は知らない間に妖怪化していく。

（カマラ様に抱いて貰って、人間を辞めるのが本来の幸せなんだろうけど♪）

と目を細めながら、猫猫は優越感に浸っていた。

「ふはあっ♪んふううっ…♪」

胸が熱いわ。こんなにくすぐ効果が？」

「はいっ♪もう絞れるかも知れません。やってみてください」

「い、いいの？んんっ…！おおおっ♪何か込み上がってくるわっ♪」

ビュルルウウ…♪ビュルビュルッ…♪

梨花妃のたわわなおっぱいから勢いよく母乳が吹き出す。

それを浴びながら、猫猫は掴んで絞ってあげた。

ビュルビュルルウッ…♪ビュルルッ…♪

「出てるう♪出てるわあっ♪」

あふうううっ♪母乳漏れ出ちゃううっ♪

それだけなのにいいっ気持ちいいなんてえ…♪」

「薬を飲んだばかりなのに、勢いが凄いですね♪相当、たまっていたのでは？」

主上が相手ではメスイキは出来ないでしょう？

今は存分に気持ちよくなればいいんです♪」

「それはあ…おおおっ♪」

も、揉まれたらあ…んんっ♪

いいわあっ♪もっとお…もっとっ♪」

その場に誰がいるかなんてお構いなしに、快楽を貪る様は浅ましいとしかいいようがない。

カマラは猫猫が仕込んだ上級妃の乱れっぷりに邪悪に微笑んだ。

三姫はカマラに命令されるまでもなく、身を引く。

母乳やヨダレでテラテラと輝くその裸体は、カマラと同じ薄紫色に染まっていた。

「盛り上がっていますな。

どれ、私にも牝乳を頂けますか？」

カマラは梨花妃の両乳房を鷺掴みにした。

猫猫はタイミングよく手を引く。

「ううっ！？おおおっ♪」

おほおおおっ♪そんなにきつくうううっ♪」

カマラがこねくり回すことに、指の間を行き来る乳首から母乳が飛び散る。

「はははっ！なんていやらしい！！」

素晴らしい乳吹きじゃないですかっ！！」

そう笑いながらカマラは舌を、梨花妃の唇に這わせた。下賤の者と口づけを交わすなど、上級妃にあるまじき行いだ。

だが我慢は出来なかった。

梨花妃にも分かっていたからだ。

舌を絡め合わせれば…猫猫の時のように、気持ちよくなれると。

「あむっうっ♪んんちゅうっ♪
はふうっ！んんふうっ♪ちゅうっちゅうっ♪」

梨花妃は夢中でカマラと唇を重ねる。

唾液がビチャビチャとこぼれるような情熱的なキスを。

「おいひいっ♪んんふうっ♪」

貴方のお……んんむうちゅう♪

舌が絡んできてえ……ちゅぱちゅうっ♪」

カマラの喉奥まで、梨花妃が舐め回すように求めている。彼女の身体も少しずつ変化していたのだ。

母乳ダダ漏れの乳首をひねりあげながら、カマラは唇を離した。

「ふうっ！

頃合いですね。房中術を授けましょう。
二度と人間には戻れない奇跡の術を！」

まだ房中術にこだわるカマラに、皮肉屋の猫猫だが突っ込んだりしない。

そういうところも愛おしいと受け入れてしまえる。

（王氏だったらこうはいかないでしょう。
愚鈍だと笑うかも知れませんが♪）

猫猫が不敵に微笑むなか、カマラは梨花妃をベッドに押し倒した。彼女の服は唾液と母乳、そして愛液でもう見るも無惨な状態だ。

それを乱暴に腕力で引きちぎった。

普段の梨花妃ならば、そんな狼藉に憤っていただろう。だが待ち望んでいたかのように、両手をのばしてカマラを受け入れる。

「んんっ♪は、入ってきますっ♪

あふう…はあんっ♪

お、おおきいい…おおおっ♪」

カマラは遠慮なく、ギンギンになった肉棒を突き入れる。ベッドがギシギシと揺れ、そのたびに梨花妃の嬌声が漏れる。

「おふうっ♪ああんっ♪

あんっ、はあんっ♪

帝とは…比べ物にならない…♪

やはり貴方は…おおっ♪」

筋肉質なカマラの胸板を撫でつつ、梨花妃は嬉しそうに快楽を受け入れる。カマラがピストンしやすいように、脚をM字に広げ、背中に絡めた。

「いいわあっ♪最高に気持ちいいのおっ♪
んんっ♪んんふうっ♪

身体中が貴方を求めてえ……りゅうっ♪」

ビュルルッ♪ビュルユビュルウウウ♪

身体が揺れるたびに、母乳が飛び散っていく。
カマラは右乳を手に取ると、乱暴に吸い始めた。

「おおおっ♪おっぱいいいっ♪

しゅわれたらああ…おほおおっ♪

こんなにいい……敏感なんて！

だめえよお！こんなのおおおっ……！！
んほおおおっ♪」

喜びの雄叫びを上げる梨花妃に、猫猫と三姫は彼女を囲むように集まった。

全員がすでに薄紫色の肌に変わり、目を金色に輝かせている。そして何よりも人間離れしたその長舌をチロチロと見せつけた。

妖怪に囲まれた絶望的な状況。

上級妃でなくても、快楽に興じている場合じゃないと慌てるだろう。正気を取り戻すに余りある。

だが梨花妃は二ヘラツと笑った。

「んんふうっ♪猫猫もお……♪

もう貴方の虜なのねっ♪だから私にこんな薬を？

おふうっ♪ちゅぱあ…♪」

梨花妃は、口を開けて舌を出す。

そこには唾液でテロテロになったカマラの丸薬が妖しく輝いていた。

「そうです、梨花。

お前の子宮に私の眷属である印を刻んであげましょう。後戻りは出来ない人間を辞める為の印を。

妖怪変化し、未来永劫に私の下で快楽を貪るのです。
永遠に乳を吹き続けるのです……！！」

カマラはピストンしながら、梨花のお腹をトントンと爪の先でつついた。

そのたびに梨花のおっぱいはビュルビュル♪と母乳を吹き出す。

気持ちよかった。
もう何事にも代え難いほどに。

「は、はいいいっ♪
未来永劫お♪カマラ様のためにい……んふううっ♪
乳を吹きたいのお♪欲しいっ！欲しいわっ♪
ああっ……！」

気高き淑女が堕ちた瞬間。
母乳まみれの艶姿なのに、神々しい。
これが妃たる者の気品なのだろうか。

カマラは「承知した」と言い、頬が裂けるほどに大きく笑った。梨花のお腹に赤い光が灯る。

淫紋が刻まれていく。
美しいシミ一つない肌に墮落の証が煌々と光る。
そしてその肌が薄紫色に染まっていった。

「こおこれがあ……♪
乳を吹き続けられる身体あ♪
あああっ♪淫乱妖怪の身体なのね♪

いいっ♪オチンポ様を受け入れたままあ……変わっていく自分がこんなに心地良いなんてえっ♪」

梨花の舌も人間離れした長さに変わる。
梨花は上級妃の美しさをそのままに、妖怪変化を果たしたのだ。

これには猫猫も感嘆の声を上げた。
カマラの気分も高揚していく。

「いいぞっ！お前のようなものを手に入れられた

この時が、何よりも格別だ……！んんおおっ……！
お前の子宮を私のザーメンで満たしてやる……！
帝などにお前を触れさせるものかっ……！」

「はいいいっ♪帝が諦めなくなる位のお……素敵な濃厚ザーメンっ……！私の子宮にくださいませ……！
そしてええっ……乳を撒き散らせてええっ♪」

「おおおっ……！」

ドピュルウウッ……！ドブドブッ……！

カマラが射精と同時に身体を震わす。

「いひいいいっ♪せいえきいいいっ♪

んんくうっ♪イクウウうっ♪
お乳もイツちやうううっ……おほおおおっ♪」

梨花も精液を受けた瞬間に、受精したように身体を仰け反らせビクビクと絶頂した。
そして宣言通りに、これまで以上の量の母乳を吹き出して辺りを汚した。

ダランと長舌を垂らしながら、悦に浸る梨花をカマラは愛おしげに撫でる。
その時だった。

人払いをして誰もいないはずの扉がギィッと音を立てて開いたのだ。

さすがの猫猫も驚愕の表情で警戒する。
もはや、この場所に人間は一人もいない。

誰に見られても、厄介なことになる。

緊張感がカマラ達にも走ったその瞬間。
明るくはしゃいだ声で、小蘭が愚痴った。

「もぉっ！猫猫。

先に金剛宮に来てね、って言ってたのに！
こっちは準備万端なんだから。

ねっ？里樹」

小蘭の後ろには、おどおどとした里樹妃が着いてきていた。その肌はすでに薄紫色に染まっている。

小蘭が猫猫の精製した丸薬を使ったのだろう。
確かに準備万端だ。

猫猫が金剛宮を後回しにしたのは、単純にあの中には裏切り者も多いということがある。

信頼のおけない者ほど、里樹妃を嚴重に監視していると思っていたからだ。

だが其の者でも、水晶宮までは見張ることが出来ない。

里樹妃を妖怪に墮としたことで、小蘭が暴走した結果なのだろうが、これは棚からぼた餅だ。

「小蘭、お手柄です。さあ、里樹もここに来て”妃教育”を始めましょう♪」

猫猫が手招きする。

まだ穢れを知らない無垢な身体にどんな快楽を刻むのか？

それを企みながら、猫猫は長舌でペロリッと唇を樂しそうに舐めるのだった……



あとがき

薬屋のひ〇りごと本！その2を読んで頂きありがとうございます！！
楽しんで頂ける内容になっていることをお祈りするばかり。
そして2期もすごかったですね！3期に映画も決まり、
楽しみすぎる！！

同人誌の内容的には、あまりこれ！！というような
アイデアが出ずで、かなり力技になったところなど
反省点が多々ではありますが、とにかく完成出来て
良かったです！！

とりあえずは薬屋本はこれで完結にはなりますが、
3期や映画でまた別シチュで同人誌にすることも
できるかなとは思っていますので、いずれまた！！
(描きたいものいっぱいであれではありますが)

最後に今年も本当に色々と皆様お世話になりました！！
来年も頑張っていきたいと思えます！！
それでは皆さま、よいお年をお迎えください！！

さなつき

奥付け

- 発行・著者 さなつき
- サークル アヘアジフ
- Email neko998-aheaji@yahoo.co.jp
- Pixiv 41042507
- Twitter @sanatuki0510
- 印刷 ねこのしっぽ様
- 発行 2025/12/31

ご主人様のはかりごと2～上級妃に迫る妖怪堕ちの魔手
ヤクオチNTR～

- 著者 日高久志
- pixiv <http://pixiv.net/users/4853918>
- ノクターン <http://xmypage.syosetu.com/x8371q/>

**制作
アヘアジフ**

**この作品は
二次創作であり
原作とは一切関係ありません**

複製を禁止する